一般社団法人 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会

NEWSLETTER

第 29 号
2026 年 1 月 14 日発行

2025 年度の事業内容

第 38 回 看護研究セミナー
日時: 2025 年 12 月 20 日(土)
13:00 ～ 16:00
場所: 大阪医科薬科大学
本部北キャンパス

第 39 回 近畿・北陸地方会学術集会
日時: 2026 年 3 月 7 日(土)
場所: 和歌山県立医科大学

次期(2026 年 4 月 1 日～2028 年 3 月 31 日)世話人代表の選挙を実施しました

[投票期間]
2025 年 12 月 8日(月)～
2026 年 1 月 9日(金)

[方 法]
Web 投票:
学会 HP「会員マイページ」

一般社団法人 日本看護研究学会
近畿・北陸地方会

世話人代表 武用 百子
大阪大学 医学系研究科
事務局 山内 彩香
大阪医科薬科大学

TEL: 06-6879-2546(武用)
E-mail:
momo-bu@sahs.med.osaka-u.ac.jp(武用)
saika.yamauchi@ompu.ac.jp(山内)
本地方会に関するお問い合わせ・ご連絡は上記までお願いします

2025 年度 世話人代表挨拶

新年を迎え、謹んでお喜び申し上げます。

世話人代表を務め 2 年目を迎えました。昨年 12 月 20 日(土)には、「体験して学ぶ質的研究入門―現場の疑問を研究につなげよう―」をテーマに、泊祐子先生(大阪医科薬科大学)を講師にお迎えし、セミナーを開催しました。コロナ禍以降、久しぶりの対面開催となりましたが、約 50 名の方にご参加いただき、看護研究学会らしいテーマのもと、活発な学びと交流の場となりました。

対面で語り合い、研究や実践の思いを共有する中で、近畿・北陸地区がこれまで大切にしてきた「横のつながり」の意義を改めて実感しています。2026 年は、このつながりがさらに深まり、地域に根ざした研究と実践の発展につながる一年になることを祈念いたします。

3 月 7 日には、第 39 回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会が開催されます。開催地である和歌山は「梅の名所」としても知られ、例年この時期は梅が見ごろを迎えます。温暖な気候に恵まれ、海の幸も豊かな地です。ぜひ和歌山に足をお運びいただき、実りある交流のもと、活発なディスカッションを繰り広げていただけますようお願い申し上げます。

世話人代表 武用百子

日本看護研究学会近畿・北陸地方会では、一緒に活動してくださる方を心より歓迎いたします。

第 39 回 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会学術集会

【日 時】2026 年 3 月 7 日(土)
【場 所】和歌山県立医科大学保健看護学部
三葛キャンパス MIKAZURA campus (和歌山市三葛 580 番地)
【テーマ】 研究と実践に感謝 ―更なる発展を求めて―
【集会長】水田 真由美(和歌山県立医科大学)
【プログラム】
特別講演:「看護職のためのセルフ・コンパッション」 有光 興記 先生
教育講演:「研究のスキルアップを目指して」 下川 敏雄 先生, 泊 祐子 先生
【参加申し込み】2026 年 2 月 17 日(火)まで

学術集会長挨拶

和歌山での開催は 13 年ぶりの 2 回目となります。今回のテーマは「研究と実践に感謝―更なる発展を求めて―」としました。今日までの看護の進化は多くの研究や実践によってなされてきました。このことに感謝をすると同時に、今後、さらなる発展を求めて参加者の皆様とともに意見交換ができる会にできればと思っております。特別講演は「看護職のためのセルフコンパッション」と題して、関西学院大学の有光興記先生にお願いしました。看護実践者や研究者自身が実践・研究を行うにあたり、ストレス軽減やウェル・ビーングを高める支援として、マインドフルネスの活用が期待されます。研究と実践の更なる発展のためにも皆様の活力を養っていただければ幸いです。

学術集会長 水田真由美

第 38 回 看護研究セミナー 体験して学ぶ質的研究入門

看護研究セミナー委員会 委員長
千里金蘭大学 合田 友美

第 38 回看護研究セミナーは、泊祐子氏を講師に迎え、「体験して学ぶ質的研究入門」をテーマに、対面形式の講義・演習の 2 部構成で開催されました。近畿・北陸地方会としては久しぶりの対面開催となり、当日は会員 20 名、非会員 23 名の計 43 名が参加し、会場は終始活気にあふれていました。質的研究にこれから取り組もうとする方から、すでに研究や教育に活用している方まで、多様な立場の参加者が一堂に会したことも、本セミナーの大きな特徴でした。

前半の講義では、「質的研究とは何か」「質とは何を意味するのか」といった基本的な問いを参加者全体で共有し、質的研究の考え方の要点が簡潔に示されました。あわせて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）について、看護現象における時間・空間・人との関係性を大切にしながら、複雑な現象を整理し理解するための方法論として紹介されました。

後半の演習では、模擬データを用いて個人ワークとグループワークを組み合わせた実践的な学びが展開されました。参加者はそれぞれの視点でデータと向き合い概念化を行い、グループワークでは解釈の違いや着眼点の多様さについて活発な意見交換がなされました。会員・非会員、研究経験の有無といった立場を超えて対話が深まり、互いの考えに刺激を受けながら学びを高め合う様子は、対面開催ならではの熱気を感じさせるものでした。全体共有では各グループの概念図が示され、同じデータから生まれる多様な解釈に、驚きや納得の声が上がる場面も見られました。

セミナーを通して、質的研究への理解が深まるとともに、参加者同士がつながり、学び合う場が形成されました。名刺交換や休憩時間での会話も活発に行われ、新たな交流が生まれたことも印象的でした。本セミナーが、今後の研究活動や教育実践、さらには継続的な交流へとつながる契機となることを期待しています。

最後に、講義と演習を通して参加者の学びを支えてくださった泊祐子氏には、企画段階から当日の運営に至るまで多大なご尽力を賜りました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

広報委員報告 「万博で広がる視野！ 深まる看護研究！」

再生医療の切り札!!「iPS 細胞」の今!!

2006 年に京都大学の山中伸弥教授らの研究グループが作成に成功した「iPS 細胞」は、臓器や組織の機能を回復させる再生医療への実用化が期待されています。大阪ヘルスケアパビリオンでは、心筋シートの展示がありました。移植でしか回復できなかった人への救いです。
近い将来、再生医療に特化した専門知識を備えたスペシャリスト看護師が求められる時代が訪れるかもしれません!?

川口 めぐみ

写真提供：(公社)大阪パビリオン

世界の人道危機と支援の現状

国際赤十字・赤新月運動館では、世界の人道危機と支援の現状を学べる半球型ドームシアターで、イスラエルのガザ地区や東日本大震災、阪神・淡路大震災などで活動された赤十字職員の方々の活動の様子やメッセージを映像で見ることができました。現在も戦争はなくならず、戦闘によって被災している人が多くいます。そうした方々を救うために活動されている方々の努力と使命感の大きさを実感しました。また、「人間を救うのは、人間だ。—The Power of Humanity—」という言葉に深く胸を打たれました。私自身も、自分にできることから支援をしていきたいと強く感じました。

金粕 仁美

50 年の時を経て—ミライへ続くケアの技術

「ミライ人間洗濯機」は、1970 年の大阪万博で話題となった「人間洗濯機」が進化し、カラダだけでなくココロまで洗い、健康管理も支援する技術が搭載されている。心電図モニタリングにより、利用者の体調や感情に合わせて映像が変化する仕組みだ。現在は介護現場での活用を目指し、さらなる開発が進められている。

50 年前の万博の想いが未来へと受け継がれていることに、私の心も洗われるような気持ちになった。研究とは、人々の想いを受け継ぎ、未来を形づくる営みなのだと感じた。これからのミライに向けて、人々の生活はどのように変化していくのか。それに伴い、看護技術のさらなる進化も求められていくだろう。

笹井 佐和子

写真提供：
(公社)大阪パビリオン
(株) サイエンス